

② 子どもの年代に応じた読書の支援

読書習慣の習得方法と読書の目的は、年代に応じて変化していくので、それぞれの時期に適した対応が必要です。

また、幼児期から小学生、中学生、高校生と年齢が上がるに従って、不読率(1か月に1冊も本を読まなかった人

の割合)が上昇し、読書習慣の定着が難しくなります。

そのため、親の関与が大きい幼児期から読書習慣を身に付けさせ、成長段階に応じた読書活動を継続させることが大切です。

幼児期

家庭での役割が大きい時期です。

親が読み聞かせを行ったり、読んだあと親子で話し合ったり、一緒に図書館に出かけたりと、子どもに読書の楽しさを教えることが大切です。

そうすることで、「読んでくれる人とのスキンシップが図れる」、「言葉に対する興味を高めることができる」、「想像力の幅が広がる」、「新たな文字や言葉を覚えることができる」といった効果が期待されます。



小中学生期

家庭では、テレビやゲーム等の電子メディアの普及により、読書時間の減少も懸念されており、意識して読書の時間を確保していくことが必要です。

子どもと一緒に図書館に出かけたり、読み聞かせ会に参加することなどによって、子どもが読書に関心を持つ機会を増やしていくことが重要です。



高校生期

自らが読書の目的をもって、自主的に読書に取り組む時期であり、いろいろなきっかけや動機付けによって読書に関心を持ちます。

学校では、各教科・科目の学習と関連した読書活動や、学校図書館を活用した調べ学習などの取組を進めています。



③ 読書計画における目標

子どもの読書活動を推進していくためには、家庭をはじめ、市町村、学校、図書館がそれぞれの立場に応じた役割を果たし、社会全体で一体となって取り組んでいくことが重要であることから、3つの目標を設定しました。これらの目標の達成状況を把握しながら、取り組んでいきます。

目標1 一日当たり30分以上読書をしている小中学生の割合の向上

	H26年度	H30年度
小学校6年生	41.3%	50.0%
中学校3年生	34.8%	50.0%

目標2 市町村の子ども読書活動推進計画の策定率の向上

	H25年度末	H31年度
市町村(35)	57.1% (20)	100% (35)

目標3 公立図書館と連携している小中学校の割合の向上

	H24年度	H30年度
小学校	53.2%	60.0%
中学校	32.3%	50.0%

家庭ではじめる読書活動

★本に接する機会を増やしましょう。

読書が日常生活の一部となるよう、親が子どもの読書活動に関わることが大切です。親自身が読書する姿を子どもに見せたり、一緒に本を選ぶなど、具体的な行動をとることが大切です。

★読んだあとは、親子で話し合ってみましょう。

読書を通じて感じたことや考えたことを親子で自由に話し合うことで、自分で考える力が育ったり、家族間のコミュニケーションを深めることにもつながります。

単に子どもに読書を勧めるだけでなく、親が面白いと思うことを伝えることで、子どもの読書への興味を、より引き出すことができるはずです。

